

『フラガール』

2006年／日本／李相日監督作品

見る人に感動やエネルギーを与える 何かに熱心に取り組む姿

会員 佐藤 未央 (60期)



「フラガール スマイルBEST」
発売中
価格：2,380円（税込）
発売元・販売元：ハビネット
©2006 BLACK DIAMONDS

学生時代はよく映画を観たが、観る映画の数は年を経るごとに減っていく一方のように思う。そんな中、修習生時代に出会い、気分が落ち込んだ時や、やる気を出したい時に観たくなる映画が「フラガール」だ。

「フラガール」は、当時の「常磐ハワイアンセンター」（現在の「スパリゾートハワイアンズ」）誕生までの実話を描いた映画である。

物語の舞台は、1965（昭和40）年頃の福島県いわき市の炭鉱町。石油へのエネルギー革命が進む中、町は採炭事業とは別の基幹産業を模索し、「常磐ハワイアンセンター」の設立を計画する。しかし、炭鉱に誇りを持つ町の人々は、炭鉱を閉鎖してセンターを作ることに猛反対する。

そんな中、センターの設立に向け、それまでほとんど踊りと縁がなかった紀美子ら町の娘たちは、センターのフラガールとなるべく、東京からやって来たダンス教師のまどかからフラダンスを習うことになる。

まどか先生のレッスンの厳しさと人を見下したような態度に、最初は自信を失う一方だった娘たちは、

少しずつフラダンスの魅力に引き込まれ、挫折を繰り返しながらも日に日にプロのフラガールへと成長していく。一方、田舎町を軽蔑し、娘たちに踊りを教える意欲もなかったまどか先生も、紀美子たちの熱心さに次第に真剣になっていく。

そして、そんな彼女たちの姿は、ついには町の人々の心までも動かす。センターの設立は現実のものとなってゆく。最初はセンター設立に先陣を切って猛反対していた紀美子の母親が、フラダンスに真剣に取り組む紀美子の姿に心を打たれ、寒さでだめになりかけた椰子の木のためにセンター内を常夏のように暖かくしようと、自ら重いリヤカーを引いて、町中を一軒一軒回り、使っていない石油ストーブを集めて回る姿や、センターオープン当日、ソロで踊る紀美子の迫力には思わず涙がこぼれてしまう。

何かに熱心に取り組む姿というのは、美しく、見る人に感動やエネルギーを与えるものだと思う。自分も、何か打ち込めることを始めてみたくなる、そんな映画だ。